

2012年8月に改訂された自殺総合対策大綱(内閣府)において、「調剤・医薬品販売等を通じて住民の健康状態等に関する情報に接する機会が多い薬剤師」がゲートキーパーの一員であることが明記され、各地で薬剤師対象のゲートキーパー養成講座が開催されるようになった。

そもそも、ゲートキーパーとしての薬剤師に対する期待は、自殺総合対策大綱が改訂される以前からあり、2010年9月に発表された「過量服薬への取り組み－薬物治療のみに頼らない診療体制の構築に向けて－(厚生労働省)」では、「薬剤師は過量服薬のリスクの高い患者のゲートキーパー」と明記されている。具体的には、薬局を訪れる患者への声かけ、処方医への疑義照会、医療従事者間の連携を充実させることで、過量服薬リスクの高い患者に気づき、適切に関わり、必要な支援につなぐといった役割が提案されている。

自殺対策というと、「薬局でそのようなことができるのか?」と身構えてしまう薬剤師も少なくない。しかし、医薬品の乱用・依存を早期に発見し、予防していくことは、自殺を予防するうえで極めて重要な意味を持つ。つまり、医薬品の適正使用というこれまで薬剤師が注力してきた取り組みをそのまま活かすことができるのが、このゲートキーパーとしての薬剤師といえる。



共感の態度で傾聴を

過量服薬のリスクに気づいた場合、服薬指導の場面ではどのようなことに配慮すべきであろうか。過量服薬の意図を十分理解しないうちに、「どうして、そんなことしたの?」と一方的に責めることや、「そんなことしちゃ、ダメ」と患者の行動を否定することは、ほとんど意味がないばかりか、逆効果となる恐れ

すらある。患者は「この人に何を言ってもどうせわかってくれないだろう」と感じ、あなたを信頼できない援助者として位置づけてしまうかもしれない。信頼できない援助者の前では、誰しも正直になれず、口を堅く閉ざしてしまう可能性や、嘘をつくようになる可能性もあるだろう。

一方、「もっと意志を強く持ちなさい。」や、「もっと頑張らなきゃ。」などと安易に励ますことも、生きづらさを抱えながら毎日を過ごしている本人からしれみれば、「これ以上、どう頑張れっていうんだよ…」、「私のこと何もわかっていないくせに…」と受け取られる可能性があるのを避けるべきであろう。

生きづらさを抱えた患者と信頼関係を構築していくためには、共感の態度でまずはじっくり話を聞く傾聴が重要である。傾聴をしながら、患者に寄り添うことが良好な信頼関係を作っていくうえでの第一歩といえる。患者の語りに耳を傾ける際には、重要なキーワードを繰り返すことで、「あなたの話は私に十分伝わっていますよ。」というメッセージを送ることも重要である。



「まちの科学者」としての薬剤師

今一度、日頃の服薬指導の場面を思い出してほしい。服薬指導中に、医師に伝えていない事実(過量服薬以外のことも含めて)を告白された経験のある薬剤師は大勢いるのではなかろうか。「医者には言いにくい、薬剤師なら」という患者が存在することは、紛れもない事実である。実際、生きづらさを抱えた患者のなかには、医師の前ではなかなか正直になれない患者もいるようである。医師は本人が望まなくとも、患者からしてみれば、権威的な存在として捉えられる機会が多い。また、

治療する側、治療を受ける側という構造的な関係から、医師との利害関係を気にする患者もみられる。患者にとって医師との信頼関係は重要なものであり、その関係性が崩れることを恐れ、結果として過量服薬のような不都合な事実は隠そうとするのかも知れない。

一方、患者にとって薬剤師との利害関係は、医師との利害関係に比べれば、小さなものである。そもそも患者からしてみれば、薬剤師という存在は、所詮、薬局のおばちゃん(おじちゃん)に過ぎないのかもしれない。かつての薬剤師は、「まちの科学者」と呼ばれていた。専門知識を持った薬局のおばちゃん(おじちゃん)は、地域住民から信頼され、尊敬される存在であったという。この権威的ではない患者との関係性が、相談しやすい環境を作りだしているのかもしれない。相談に対する「敷居の低さ」は、薬局の薬剤師が誇るべき利点であり、ゲートキーパーとしても大切にすべき点である。

フィジカルアセスメントなど、専門的な知識や高度な技術を身につけ、より質の高いヘルスサービスを提供していくことは、これからの薬剤師には必要なスキルであろう。しかし、こうした専門的技術の追求は、ともすれば権威的な態度につながる危険性もある。「まちの科学者」としての敷居の低さが、患者にとっては心地の良い相談環境を生み出していることも忘れてはならない。



抱え込まずに「つなぐ」

薬剤師1人ができる患者支援には当然限界がある。1人の薬剤師が患者を抱え込んでしまうことは、ともすれば薬剤師自身が潰れてしまう恐れもある。1人で問題を解決しようとせず、薬局全体で患者を支える体制が求められる。また、患者に寄り添う姿勢を維持し

つつ、他の専門家につないでいくこともゲートキーパーとして重要な役割である。

処方薬に関することであれば、やはり処方医とのコミュニケーションが重要となる。しかし、過量服薬に気づきながらも、約4割の薬剤師が処方医に疑義照会や情報提供を積極的にしていないという報告がある⁶⁾。「主治医であれば、患者の状況はわかっているだろうからあえて連絡する必要はない」と消極的な理由が目立つ一方で、医師とのやり取りをめぐって苦い経験を持つ薬剤師も多く「処方医や患者とのトラブルを避けたいから」という理由も多い。しかし、疑義照会は薬剤師法で定められた義務である。疑わしき事項があれば、薬剤師は迷わず疑義照会すべきであり、医師も疑義照会の意図と目的を十分に理解する必要がある。また、過量服薬などの事実を処方医に話していない患者がいることを改めて思い出してほしい。医師が薬剤師に期待しているのは、診察室では知り得ない患者の様子や服薬状況に関する情報提供である。

前述のように、メンタルヘル스에不調がみられる患者の問題は、医療的な側面だけではなく、生きづらさの背後にはさまざまな心理的・社会的な問題が存在する。地域には医療機関以外にも、さまざまなメンタルヘルスの支援資源が存在する。例えば、精神保健福祉センターは全国の都道府県および政令指定都市に設置されているメンタルヘルスの相談機関である。精神科医をはじめ、精神保健福祉士、保健師、臨床心理士といった専門家が働いている。地域には、その他にも保健所、福祉事務所、児童相談所、自助グループなどの支援資源がある。地域のメンタルヘルス支援サービスの役割を理解し、適切な支援につないでいくソーシャルワーカー的な機能もゲートキーパーとしての薬剤師に求められる役割であろう。

参考文献

- 1) 松本俊彦ほか：わが国における最近の鎮静剤(主としてベンゾジアゼピン系薬剤)関連障害の実態と臨床的特徴 覚せい剤関連障害との比較. 精神神経学雑誌, 113 (12): 1184-1198, 2011.
- 2) 廣川聖子ほか：死亡前に精神科治療を受けていた自殺既遂者の心理社会的特徴：心理学的剖検による調査. 日本社会精神医学会雑誌, 18 (3): 341-351, 2010
- 3) Rodham K, et al : Reasons for deliberate self-harm: comparison of self-poisoners and self-cutters in a community sample of adolescents. J Am Acad Child Adolesc Psychiatry, 43 (1) : 80-7. 2004.
- 4) Owens D, et al : Br J Psychiatry, 187 : 470-47, 2005.
- 5) 松本俊彦ほか：Benzodiazepines使用障害の臨床的特徴とその発症の契機となった精神科治療の特徴に関する研究. 日本アルコール・薬物医学会雑誌, 47 (6) : 317-330, 2012.
- 6) 嶋根卓也：ゲートキーパーとしての薬剤師：医薬品の薬物乱用・依存への対応. YAKUGAKUZASSHI, 133 (6) : 617-630, 2013.

嶋根 卓也

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所
薬物依存研究部 心理社会研究室長

1998年東京薬科大学薬学部卒業，調剤薬局勤務を経て，2008年順天堂大学大学院医学研究科修了．国立精神・神経医療研究センター流動研究員，同センター研究員を経て，2012年より現職．

南山堂 書籍のご案内

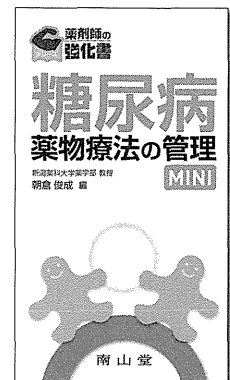
薬剤師の強化書

糖尿病 薬物療法の管理 **MINI**

新潟薬科大学薬学部教授 朝倉俊成 編

2010年9月に発刊した薬剤師の強化書シリーズ「糖尿病薬物療法の管理」のエッセンスのみを集約したポケット版。臨床現場で患者さんに質問された際や，必要なときにすぐに調べられるように，白衣のポケットに必携の一冊！

- ◆ ポケット判 260頁
- ◆ 定価（本体 1,800円+税）



 南山堂

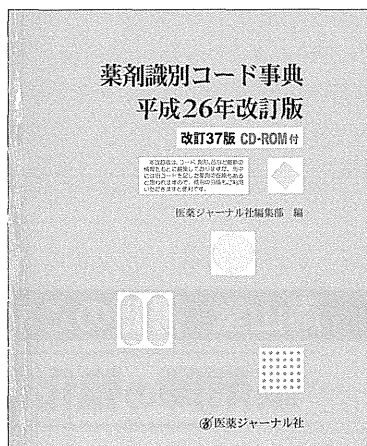
〒113-0034 東京都文京区湯島4-1-11
TEL 03-5689-7855 FAX 03-5689-7857 (営業)

URL <http://www.nanzando.com>
E-mail eigyo_bu@nanzando.com

薬剤識別コード事典

平成26年改訂版 **CD-ROM付**

充実した検索システムと付属**CD-ROM**により、
医薬品管理に必要な情報の検索効率がさらにアップ！



医薬ジャーナル社 編集部 編

A B判 約500頁

付属CD-ROM (Mac・Win ハイブリッド形式)

定価 5,040円 (本体 4,800円 + 税 5%)

送料実費

ISBN978-4-7532-2649-8 C3047

最も使いやすい医薬品識別事典の決定版、
平成26年改訂版(改訂37版)近日発刊

- ① 数字，アルファベット，ロゴマークなど多方面からの検索が可能な索引群。
- ② メーカー別掲載で見やすい！
- ③ 新薬・後発品をもれなく網羅！
- ④ 改訂版発刊後，ウェブサイトにて12月収載後発品と新規収載薬を含む追補版を公開！

* 本書発行後の薬価基準新収載の医薬品については，月刊誌「医薬ジャーナル」に随時，識別コードを掲載しています。

株式会社 **医薬ジャーナル社** 〒541-0047 大阪市中央区淡路町3丁目1番5号・淡路町ビル21 電話 06(6202)7280(代) FAX 06(6202)5295 (振替番号) 00910-1-33353
〒101-0061 東京都千代田区三崎町3丁目3番1号・TKビル 電話 03(3265)7681(代) FAX 03(3265)8369

<http://www.iyaku-j.com/>

書籍・雑誌バックナンバー検索，ご注文などはインターネットホームページからが便利です。
